

第5回目は特別編です。

第1回から第4回の入門編では、それぞれのジョブを実行し結果を確認しましたが、その実行結果から見ると実行時間がたかたか200レコード程度の処理に数秒掛かっています。
これでは到底業務で使用しようとは思わないでしょう。しかし今までは、「実行」というアクションをPC側で行っていました。これはあくまでPCの能力でしかありません。
そこで、このジョブの定義をiBMiに移行して実行してみたいと思います。
talendのOpen Studioは、実際にはjavaのジェネレータですので、Open Studioにはプログラム一式をzip形式に纏めて、移行する手段が提供されています。ここでは、その方法を解説します。

参考: iBMi (DISK2本のPowerBlade) でのテスト結果は、99,999レコードを同じようにソートした場合約60秒で完了しました。
因みにPCでは72,000レコードで326秒掛かり、iBMiでは45秒でした。

ご注意:

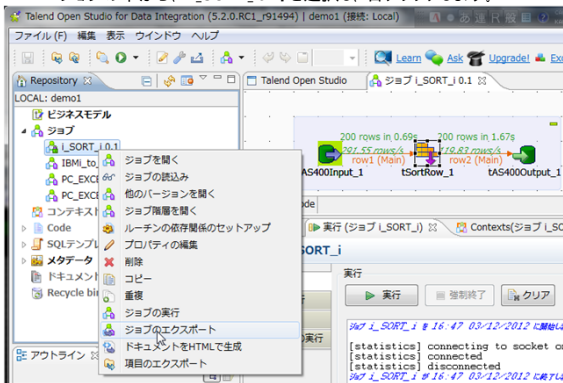
ボランティアとしてご紹介しておりますので、本書に記述した内容に関して仮に問題があったとしても、ご利用される皆様の責任において、ご活用いただけますようお願いいたします。

補足:

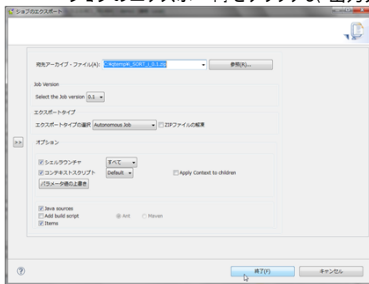
Talendをお使いになる上での注意点としては、Talendのバージョンによって出来たり出来なかったりする機能がありました。今回テストしたケース(範囲)で言えば、TOS.DI-Win32-r91494-V5.2.0RC1では問題なく稼働しましたが、「TOS.DI-Win32-r84309-V5.1.1」では、同じ定義をしても実行するとアペンドしたり、SQLのテストが出来ないなど、様々な問題が起き余分な時間を使ってしまいました。
業務で使うにはやはりコミュニティー版では無く、ライセンス版をお使いになることをお勧めします。
また今回ご紹介した設定は簡単な機能のみでしたので、研修など受けずに出来ましたが、もっと高度な機能をお使いになるあるいは本格的に活用される場合は、研修をお受けになる事をお勧めします。

それでは第5回目の特別編の説明に入ります。

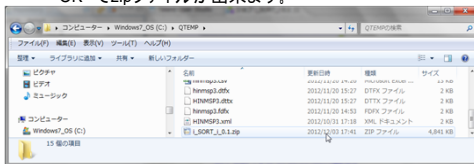
まず、talendを起動してください。
以下では、第4回で設定保存した、ソートの処理(ジョブ)をエクスポートする方法を説明します。
ジョブの中から、「i_SORT_i0.1」を選択し、右クリックします。



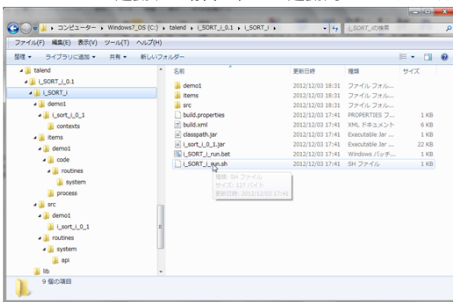
「ジョブのエクスポート」をクリックし、出力先を指定します(PCの任意の場所を指定)



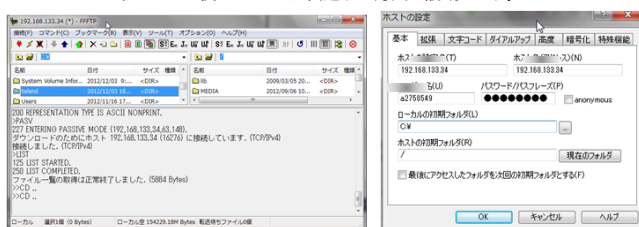
OK でzipファイルが出来ます。



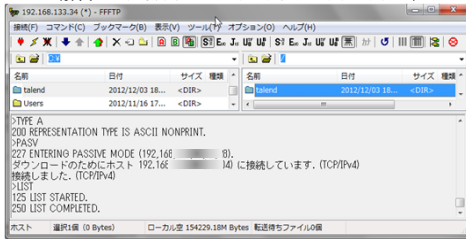
i_SORT_i0.1.zip を C:\TALEND¥以下に解凍すると以下のディレクトリーが展開されます。
また、ジョブのエクスポート時に、「シェルランチャー」を「すべて」にしているため、Windows起動用の"bat"ファイルとUNIX起動用の"sh"ファイルが作成されています。
IBMIで起動する場合は、UNIX起動用の"sh"ファイルを指定します。



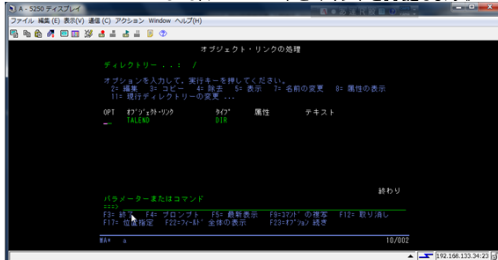
ここでは、FFFTPを使ってIBMに転送する方法を説明します。



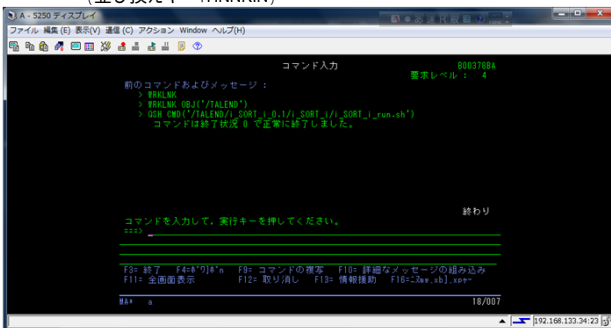
解答したフォルダーごとドラッグアンドドロップで、IBMに転送します。



IBMで転送された事を確認してみます。
WRKLINK OBJ('/TALEND')とコマンドを打鍵します。



コマンドラインから、QSH CMD('/TALEND/i_SORT_i.0.1/i_SORT_i/i_SORT_i_run.sh') と入力します。
(並び換えキー: HNNKIN)



終了コード "0" で完了です。
いかがですか、簡単に出来ました。
レコード数が多くなればなるほどIBMで実行するメリットが出てきます。一度試して見てください。